

Freedom



高校生の人権広報誌

“Freedom” 第17号

2015年 1月11日発行

編集 “Freedom” (フリーダム) 編集スタッフ

発行 奈良県高等学校人権教育研究会

毎月11日は「人権を確かめあう日」

東日本大震災、原発事故、豪雨等により被災された方々に、心よりお見舞い申し上げます。

2014年度の“Freedom”は、3校6名のスタッフでつくっています。力作が多いため、今回も香芝高校の「青葉仁会の農業体験に参加して」が次号に回ってしまいました…。コラムも新連載が始まるみたいですので、ご期待を！ 投稿や、スタッフ希望者はいつでも募集中!!



「地球のステージ4〜果てなき帰郷」を見て

奈良情報商業高校 人権クラブ

私たち人権クラブは、七月十二日に三郷町で行われた「差別をなくす町民集会」に参加しました。今回はその中で行われた「地球のステージ」について感想を書かせていただきます。

「地球のステージ」とは、静止画、語り、ビデオ映像、そしてライブ音楽を交えて、NPO法人「地球のステージ」代表、桑山紀彦さんが海外支援活動で経験したことなどを伝えてくださる講演です。いまでは、五つのシリーズとなり、全国で行われています。

私たちが見たのはその四シリーズ目「STAGE4〜果てなき帰郷」でした。

このシリーズは主に、貧困や被災の中にある子どもたちの「心のケア」に関するエピソードと、桑山さんが自転車で日本を一周した時のエピソードで構成されていました。

「心のケア」に関するエピソードは四つあるのですが、私はパレスチナでの話が一番心に残っています。パレスチナでは、ガザ地区での戦争が続いていて、それによって多くの命や建物などが失われ、人々の心に大きな傷を残しています。

桑山さんは「壊れた家屋の廃材を使って楽器を作ってみないか」とパレスチナの少年たちに持ちかけます。少年たちは喜んでそれに応じました。しかし、一人だけあまり乗り気ではない少年がいました。平和な日本に暮らして

いながら時折やってくる桑山さんが気に入らなかつたのです。拒絶されながらも桑山さんが出した答えは「分らない」という強い意志でした。桑山さんはその後も何度もパレスチナを訪れました。私なら心が折れていることでしょう。桑山さんの強さと優しさに憧れの念をいだきました。

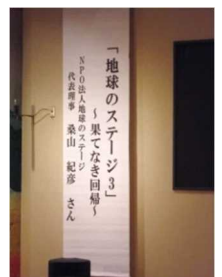
自転車日本一周のエピソードでは、高校時代、自分が嫌いで何事にも自信を持てなかつた桑山さんが、大学生になって自転車で旅に出た先での出会いについて語られていました。

そもそも、なぜ、桑山さんが日本を一周しようだなんて思ったかというところから逃げ出すためです。しかし、逃げ出した先で多くの優しさに触れました。桑山さんは見ず知らずの自分に無償の心を向けてくれる人々に出会い、自分がいかに小さいことを気にしすぎたか気づくことができました。このことがあったから今の桑山さんがあるんだなあと考えるエピソードでした。

語ってくださった内容だけでなく、音楽や映像もすばらしいものでした。音楽は桑山さんの心の底から声を出しているような力強い歌声と、世界中のあちらこちらに足を運び、現地を見てきたからこそ書けるのである



う、メッセージ性のある力強い歌詞で、聴いていて胸を打たれました。映像は、世界の美しい自然や貧困や震災に苦しむ子どもたちの姿で



貧困や震災の中でも笑顔絶やさない子どもたちの姿を見て、私は「こんな苦しそうな状況なのに何故笑っているのだろうか」と疑問に思いました。それと同時にこの状況下にある子どもたちを笑顔にできる桑山さんは本当にすごいと思いました。でも、この笑顔は、桑山さんがしたことの結果だけでなく、子どもたちの「生きよう」という意思の表れなんだなと思います。私もこの子たちに負けず、どれだけ苦しい状況下におかれようとも笑って強く生きていこうという勇気をもらいました。

私にとって海外で様々な活動をされている方のお話を聞くことができたいのは、大きなことでした。世界の国々を訪れ、その人々が抱える問題や悩みを多かれ少なかれ解決している人がいるのに、私はこの日本の中にある差別にどれほど立ち向かっているのでしょうか。今となっては声を大にして言われることの少なくなった部落差別。しかし、その部落差別に苦しんでいる人は、確かに存在しています。高校に入学し、人権に関する学習が少なくなり、差別を無くすために何をすればいいの

うということ、考えることが少なくなってきた私が、改めてそのことを考えるきっかけとなりました。
(奈良情報商業高校二年 源内 英斗)

DVD版 「地球のステージ」を見て

私が、「地球のステージ」を見終わって最初に思ったことは、映像に登場した人たちが桑山さんと共にみんな笑顔ということでした。人種や住んでいる国などは、みんな違うのにいい笑顔で写真に収まっていて、すごくいいなあと思いました。

「地球のステージ」では、人々以外にも様々な国の景色などが映し出されていてその中には、綺麗な情景が映し出されているものや、反対に、災害、震災、津波などで崩壊し流されてしまった建物の映像が映されていました。

その中で私が印象に残った映像は、東日本大震災で避難所生活をしている子ども達がサッカーをしている映像でした。その部分は、一枚目はサッカーをしている写真で二枚目、三枚目は、笑顔で記念写真をとっているところでした。その部分を見て私は、辛い状況下でも楽しめることを見つけてみんな楽しんでることに感激し、同時に少し羨ましいと思いました。その理由は、私自身が皆の輪に入っていくことが苦手だからです。だから、もし仮に自分が被災してしまったら輪などに入れず

(二面に続く)

皆さま、いつも『Freedom』をご覧いただきまして有り難う御座います。今回のコラムを書かせていただく、高校一年の御幸橋 深雪(みゆきばし みゆき)です。

これは、私が小学校低学年に経験した話です。私は小さい頃、どうしてか人から嫌われ、いつのまにか、いじめの格好の標的となっていました。私は勇気を出して「どうして、そんなひどいことをするの？」と聞いてみると、「お前が気に食わないから」とか、「お前が弱いから」・・・最後には「ケンカしたいから」などと言って絡まれることが毎日のように続きました。私の小さい頃の記憶にはそんな状況に耐え続けた日々が残っています。

当時の私の心の中で叫んでいた独り言・・・。
私にとって楽しい日。「それってなに？」 「遊びってなに？」 「ねえ、教えてよ。」 「私の楽しい時間を返してよ。 私の・・・私の大切な子供時代を返してよ！」 「集団で弱いものいじめって楽しいの？」

いじめて良くないとみんなは言うけれど、「どこが悪いのかみんなわかっているの？」 と聞くと、「わからない」とそういう回答しか来ない。「わからない」なんておかしいじゃないの？

過去のつらい記憶が蘇り、その時の感情のまま私の思いを書かせていただきました。

このような感情を我慢し続けると、とても不安定な精神状態になって、心身共に支障をきたしてしまいます。私は傷つく言葉を投げかけられると度々意識を失ったり、昔のいじめられた記憶がフラッシュ・バックします。ましてや忘れてたくても忘れられない、そこまで深い傷を負ってしまいます。今でもそれが付きまとい、ひどいときには幻聴が聞こえてきたりします。

私の例は、『まし』なほうだと思います。何故なら「いじめが原因で亡くなった」というニュースを見るからです。

もちろん、当時この場から逃げてしまいたいと考えたことは何度もありました。「どうやったら、いじめから逃げられるのかな・・・」と考えたり、とにかくつらい毎日を過ごすことにうんざりしていた時期もありました。正直、どうしたらいいのかかわからず、泣いてばかりいました。

『私ハ、泣クコトシカシラナイ。イツタイ、ドウシタライイノ？ ドウシタラ「イジメラレルコト」カラ逃ゲラレルノカナ？』(ここを何故片仮名表記にしたのかは、その時の感情を強調したかったからです。)

いじめに悩む『悪循環』は、こんなふうに繰り返すのです。私は逃げてしまうという選択肢は選びませんでした。実際「いじめを苦しめて亡くなった」という人もいます。これはとても悲しく、つらいことですね。

「いじめから逃げてばかりいてはダメ。」と言う人がいらっしやいます。いじめられた当人はなかなか人に相談する勇気がでないものです。人に相談すると、その事でまたいじめられるのではないかと考えるからです。しかしこのままではなんの進展にもなりません。では、いったいどうしたらいいと言うのでしょうか？ 当人の気持ちの持ち方、そして周りの協力によってこの『悪循環』から脱出できるのではないかとというのが私の感想です。先に述べた通り、精神がやられたままの一人では、いじめは解決しません。さらにいじめられて、苦しみ、また泣き寝入りをするだけです。つまり、『悪循環』の繰り返しです。そこで『悪循環』を断ち切る行動が必要なのです。

今回はここまでです。ご清覧有り難う御座いました。

(一面から続く)

助け合ったりできないかもしれないと考えると、D.V.Dを見ていくにつれてそんな悩みは消えていきました。すべて見終わったあと私は悲観的に考えたりせず前向きに考えてみようと思うようになりました。「地球のステージ」を見て本当によかったと私は思いました。そして、約一年と半年ある高校生活の中で、人権のことを考えたりできる時間を少しでも多く作れたらいいと思いました。(奈良情報商業高校二年 今井 紗弥)

※桑山 紀彦氏について

職業 心療内科医・精神科医
NPO法人「地球のステージ」の主権者

一九八九年、タイ国境でのカンボジア人難民キャンプ「カオイダイ」をかわきりに、医療救済等で国際協力を始める。一九九六年「地球のステージ」初演、その後、国際協力を続けながら、その思いや現状を伝える「地球のステージ」の講演を続ける。二〇〇九年には二千回記念講演を行う。また二〇一一年には東日本大震災により、宮城県名取市で自身が被災するも、翌日から被災者の診療にあたり、今日に至る。詳細はホームページで。
(<http://www.e-stage.org>)



高解研 夏期研修会
参加体験記

七月二十五日、私は高解研夏期研修会に参加するため京都へ行きまし。私は部落解放研究部に入部してから、研修会などに参加した経験がなく、今回が初めての参加となります。京都まではバスに乗って行きましたが、他校の生徒も多く参加していましたが、景品のお菓子をかけてとても楽しむことができました。

京都へ着き、まず立命館大学の食堂で昼食をすませました。そして、国際平和ミュージアムの研修が始まり、私はそこでたくさんの方の衝撃と出会うのです。

国際平和ミュージアムでは、日本の被害者の顔だけではなく、日本も加害者なのだ、というもつと知るべき事実がたくさん展示されておりました。

私は子供の頃から、映像や写真、話を通して「戦争」というものがどんなことか、知っているつもりでしたが、全く分かっていなかったのだと、今回研修会に参加して思いました。私たちがよく知っている映像の中の戦争では、体をはった兵士の生き様がカッコよく描かれていますが、それはストーリーであって、現実とは全く異なる別物なのです。平和ミュージアムで聞いたことですが、ほとんどの兵士は餓死で亡くなってしまうそうです。

今の日本は多くの食が溢れるよう

にあります。食べ物に好き嫌いがある人が多くいます。それでも、ちよつと前までの日本はそうではなかったのだと、お腹がすいてもすぐに何かを食べられる状況にはいかなかったのだと、私は平和ミュージアムに来て心臓を握られているような重みを感じました。

今の日本には幸せが溢れているのだから、もつと一人一人自分の幸せを、周りの幸せを作っていくべきだと思います。

高解研夏期研修会に参加して本当に良かった。そう思えるのは、今日出会った多くの過去の人たちの分までも「もつと幸せを作ろう」と、前を向く責任を感じられたからです。

(奈良朱雀高校三年 田中 舞)

※「高解研」は奈良県高等学校解放研究等連絡会議の略称です。当日は五校から十五名の参加がありました。



高校生の人権広報誌

“Freedom” 第17号 (2015年1月11日発行)
発行 奈良県高等学校人権教育研究会
〒630-8133 奈良市大安寺1-23-1
奈良県人権センター内
TEL 0742 (62) 5555 FAX 0742 (62) 5568
E-mail kodokyo@kcn.ne.jp
HP <http://www1.kcn.ne.jp/~kodokyo/>

※ご意見・ご感想や投稿などは、各校人権教育担当の先生または上記までお寄せください。
※本誌のバックナンバーは、高人教ホームページの「活動報告」にて閲覧できます。(「高人教」で検索してください)
※本誌の発行は奈良県教育委員会の事業委託を受けています。